

漢詩を味わう

第147回



読書 袁枚

我道古人文 我れ道う古人の文

宜讀不宜倣 宜しく讀むべく 宜しく倣うべからず

讀則將彼來 読めば則ち彼を將て來たらしめ

倣乃以我往 倣えば乃ち我を以て往く

面異斯為人 面異なりて 斯ち人と為り

心異なりて 斯ち文と為る

橫空一赤幟 橫空 一赤幟

始足張吾軍 始めて吾が軍を張るに足る

私が思うに、古人の文章は、

主張的に讀むべきであり、鵜呑みにして真似るべきではない。読むのであれば、向こうを自分の方に来させることになるが、

真似をすれば、自分が向こうに行くことになる。顔が異なるてこそ、個別の人間となり、心が異なるてこそ、個別の文章になる。

大空に一本の赤い旗印をたなびかせて、はじめてわが陣営を十分に張ることができるのである。

『倣う』真似る。模倣する。

『横空』大空に横たわり、たなびくさま。
『赤幟』赤いのぼり、旗。

袁枚（一七一六—一七二九）は錢塘（浙江省杭州市）の人で、清の乾隆・嘉靖期を代表する詩人です。二十四歳で進士に合格し、各県の知事を歴任しましたが、四十歳で官界から身を引き、江寧（江蘇省南京市）郊外の廬園を手に入れて「隨園」と名付け、八十一歳までの生涯を詩文などの創作活動に明け暮れました。

袁枚は人間の性情を大切にする「性靈説」を主張し、詩法に拘泥せず情感が自然に流れる詩作を重んじました。また「隨園食單」という料理に関する書を著し、食通として知られています。

この詩は、三十四歳の作品といわれ、讀書論を展開した面白い作品です。讀書は古人の文章を自分に引き寄せて、自分が主体となつて読むことを良しとし、作詩や文章を書く場合には、他人の文章を鵜呑みにして模倣するのはよくないとしています。

袁枚は大讀書家でしたが、詩を作るに当たっては、自然な感情の露露を重視し、典故だらけの詩を作るものを「あちこちの書物からの引用だらけで、紙面いっぱいに死気が漲っているのに該博だと自慢している」（隨園詩話）と批判しています。

この讀書論は時代を超えて芸術一般のあるべき姿を指摘し、さらに創作といふ仕事の眞実を突いています。袁枚は「遺興二十四首」のなかでも「但だ肯て詩を尋ねば便ち詩有り、靈犀の一点是れ吾が師。——ただいちずに詩を求めれば、そこに詩ができる。犀の角に一筋の白い線が通つているようすに、対象と自分との間に靈感を通わせ合うこと、それのみが作詩の先生である」と言つて彼自身の詩論を展開しています。

しかし、袁枚は古典や故事を軽んじている訳ではありません。この詩の結句で「赤幟」という語を用いていますが、これは前漢時代の韓信が王朝のシンボルカラーの赤い旗を用いたことから、のちにお手本やリーダーを示す語となつたという故事です。

書作においても、特に我々の伝統書は古典を拠り所にすることが基本です。大変難しいことですが、古典を自分に引き寄せて、その上に自分の情感を盛り込むことができれば、本来の創作作品といえるでしょう。

楓葉蕭條として水駅空し
離居千里同じくし難きを悵む
十年の舊約江南の夢
獨り聴く寒山半夜の鐘

楓葉蕭條か驛
離居千里
十年の舊約江南
夢楊聽寒

山寺夜鐘

辛丑季秋餘王漁洋詠

『大意』楓の樹はさびしく、船着き場には人影もない。遠く千里のかなたに兄達と別れてていて、この日をともにできないことを恨む。

十年以前、かつては江南とともに遊ぼうと約束したものだつたが、いま私は独りで、寒山寺の夜中の鐘を聴いている。

(王漁洋詩・夜雨寒山寺に題し西樵と礼吉に寄す)

神を凝らす

凝神

凝神

『大意』精神を凝集させる。(莊子)

東雲

東雲

読み 音信
音信 いのか
若為でか通ぜん （便りをどのようにして通わせることができるだろうか）

為
音
信
通
若

佐藤象雲書

一般部規定課題(解説)



一般部規定課題出品について

規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。

規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩
「送秘書官晁監日本國」

口は中心よりやや右に位置させ大きさが大切。

積水不可極

積水極む可から

安んぞ滄海の東を知らん

九州何處遠

九州何れの處か遠き

万里空に乘ずるが若し

向國惟看日

國は向て惟た日を見る

帰帆 但だ風に信す

鰐身映天黑

魚眼射波紅
鰐身赤い映して黒く

魚眼波を射て紅なり

外桑扶樹郷

孤島の外

主人孤島の中

別離方異域
別離方異域なりて

別離
不異境

音信若為か通ぜん

草書

行書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をぜひ出品ください。

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

音信若者
鳥通お通

音信若者
鳥通お通

次号課題

隸書

音信若者
鳥通お通
江竹征臨
告徑

音信若者
鳥通お通
江竹征臨
告徑

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

伏木重吉
タロウ
伏木

伏
一
重
十
夕
日
歲

稻の穗の穂の穂

支
部

順位

氏名

貽厥嘉猷勉其祗植
貽厥嘉猷勸其祗植
以麻糴之於我有孚惠心勿

佐藤象雲書

音
イケツカユウ
ベンキキショク

略解

嘉猷はよいはかりごと。人道を守つて一家を經營するよい計画を子孫に残すこと。祇はつつしむこと。植は立てるごと。人の道を守り、その身を立て家を興すこと。

漁味食風道首氣

道を味わい風を浪い

象雲臨

味道食風

■褚遂良・雁塔聖教序

(初唐・西暦六五三年) の臨書

(62)

『味道浪風』

今月の「書の美について」で、顏真卿の楷書を取り上げましたが、豊満な顏真卿の楷書に浸つていると、この褚遂良・雁塔聖教序の繊細な美しさが際立つて見えます。米芾は「顏は褚より出ず」と言っていますが、その真相にはなかなか辿り着けません。しかし顏の若書きの多寶塔碑や墓誌銘には、点画の活かし合いで譲り合いが見られ、空間や文字余白の美しい字が散見されます。

【味】 口偏と旁の位置取りが絶妙。右払いの起筆位置に留意。

【道】 首は空間が広くシンニヨウはやや控えめ。
【漁】 食の左払いが暢びやかで、ニスイの下まで潜り込む。横画を細線でキリリと。
【風】 一画目は下部を湾曲させて、第二画と対向している。



奥
蹟
著述

象雲臨

■孫過庭・書譜（初唐・西暦六八七年）の臨書

(43)

『奥蹟著述』

今月は文節の途中で四文字では意味を成しませんが、線の動きと流れが纖細かつ精緻で見入ってしまいます。孫過庭書譜は全長九メートルほどの巻子で、縦は約二十六センチ余りの一行に約十字位が書かれていますので、一文字は二～三センチの細字です。

書譜は、文章を推敲しながら書かれた書論の草稿です。文字を上手に書くことに専念していないなかで、この四文字のように正確に、筆先が空間を走る巧みな筆致は本当に驚きです。筆はイタチのような先の利く素材でしょうか。粘り強い連绵線に面的は線も交えて、離す点画はしっかりと空間を確保しています。

書譜の一節に「心手雙暢（心と手の両者が暢びやか）」とか「神融け筆暢ぶ（心が融和して筆が暢びやか）」といった名句がありますが、心がゆつたりとして初めて筆が暢びやかに動くことを孫過庭が実践しています。